

## GMO 貿易における表示政策の意義と限界—米欧 GM 摩擦の動向を中心に— Labeling Policy in GMO Trade, its Meanings and Limitations

山川俊和<sup>†</sup>

### <要旨>

自己資本比率の国際的なルールを定めた BIS 規制が想起されるように、様々な領域において“国際的な制度のハーモナイゼーション”への注目が高まっている。とりわけ、グローバリゼーションが進展し地球環境問題や感染症のような新しい安全保障問題がクローズアップされる昨今、環境・安全性をめぐる規制・基準についての“国際的な制度のハーモナイゼーション”をどのように進めていくかが、国際的に重要な政策課題としてクローズアップされている。

本稿では、国際的な制度のハーモナイゼーションをめぐる問題として、遺伝子組み換え体・食品(GMO/GM 食品)をめぐる規制と、それをめぐる国際的な摩擦を取り上げる。まさに現在進行形である米欧 GM 摩擦の論点とは、予防原則の解釈や国際的な制度設計のあり方、ひいては途上国のバイオセーフティ保全など多岐に亘っているが、中でも GMO/GM 食品の“属性”を開示する「表示政策(Labeling Policy)」の水準と方法は、米欧 GM 摩擦においてきわめて重要な論点を形成している。本論文は、いわゆる食品・農産物の安全性問題を環境問題として把握し、その上で、GMO 貿易における表示政策の積極面と限界を、米欧 GM 摩擦の事例から考察し明らかにしようと試みるものである。

さて表示政策をめぐるのは、既存の環境経済政策研究において財の環境負荷を表示する「エコラベル」の議論があるが、GMO/GM 食品への表示政策と「エコラベル」との関係については、必ずしも明確になっていないように思われる。そこで本稿は、GMO/GM 食品への表示政策の位置付けを確定する作業から、議論を進めていく。その整理を踏まえ次に、世界の GMO/GM 食品に関する表示政策の現状と動向を紹介する。その上で、米欧 GM 摩擦を事例としながら、供給サイドと需要サイドとの情報の非対称性を解消するとともに、摩擦への処方箋となりうる表示政策の意義を明確にしていく。また、バイオテクノロジーを応用し「生命」そのものを改変し生産されることで、人体および環境に対して様々な安全性問題が危惧されている GMO の性質を踏まえ、EU における実際の規制動向を念頭に置きながら、紛争解決手段としての表示政策の限界についても指摘する。

### <目次>

1. はじめに：問題の所在と本稿の課題
2. 安全性問題の性質と「新しい」貿易摩擦：表示政策をめぐる論点を中心に
3. 米欧 GM 摩擦と表示政策
4. 表示政策の意義と限界：むすびにかえて

---

<sup>†</sup> 一橋大学大学院経済学研究科博士課程(yamakawatoshikazu@gmail.com)